

【優秀賞】

我が家の制服

大西賢・東京都

大好きな彼女と結婚することになった。だが、私は喜びより不安のほうが大きかった。当時の私はフリーターだったからである。非正規であり、日給月給である。胸を張つて、「お嬢さんを僕に下さい」

と言える身分ではなかった。彼女は私のことを愛してくれているから問題ないが、彼女の父親お母さんは別である。大切な娘を嫁に出すのに、相手が非正規ではとてもじやないが安心できないだろう。なにせ、いつクビになるか分からないし、ボーナスもないのだ。私自身、彼女を幸福にさせる自信がなかつたぐらいだ。

「一緒に挨拶に来て欲しいの」

彼女からそう言われた時は、本当に憂鬱だった。

「フリーターの男になんて、大切な娘はやれん！」

そう言われて追い返されることも覚悟しなければならない。それは屈辱的などだったが、社会通念上、当然のことのようにも思えた。

彼女のお父さんもお母さんも、私の職業をまだ知らない。だから、交際も許してくれている。だが、結婚となると話は別である。夫がどんな職業に就いているのかは大きな問題だ。「非正規」や「フリーター」という立場をここまで深刻に考えたことはなかつたが、結婚の挨拶となると、やはり劣等感めいたものは感じた。

彼女の両親に挨拶に行く日がやつてきた。私は着慣れないスーツを着て挨拶に行つた。結婚の申し込みをするのだから正装をして行つたのだが、スーツを着ていれば正社員だと思いい込んでくれるのではないかという期待もあつた。スーツはサラリーマンの制服である。スーツを着ていることによつて、

「この青年はしつかりした人だ」

と勝手に思い込んでくれるのではないか。そんな淡い期待もあつた。

だがその反面、危惧もあつた。明らかに、スーツを着こなせていないのである。普段スーツを着ていませんという感じがありありと出ているのだ。着慣れていないスーツが非正規のフリーターであることを露呈させてしまふのではないか。そんな心配から自由ではなかつた。

彼女の両親はきちんとした身なりで待つていた。私は出されたお茶を一杯飲んだあと、あらためて言つた。

「娘さんのことを愛しているので、結婚させて下さい」

「あんた、仕事は何をしているの？」

お父さんがやはり訊いてきた。私は正直に言つた。

「老人ホームで介護のアルバイトをしています」

きらりとお父さんの目が光つたような気がした。

「老人ホームでアルバイト？　ということは、あんたは普段、エプロンをして働いているわけか？」

たしかに普段、私はエプロンをして働いているが――。

「はい、エプロンをしてアルバイトをしています」

お父さんはニッコリ笑つて言つた。

「正規だろうが非正規だろうが、そんなことは関係ない。エプロンをして働く者に悪い人間はない。あんたなら安心だ」

聞くと、お父さんは元魚屋さんであり、ゴムのエプロンをして働いていたという。お母さんは看護助手をしており、やはりエプロンをして働いていた。そして結婚しようとしている彼女は保育士であり、やはりエプロンをして働いている。彼女の一家はエプロン一家だったのだ。そのため、エプロンをして働く人に全幅の信頼を寄せていたのだ。

後日、彼女のお父さんから一枚のエプロンを渡された。このエプロンをして、これからも介護のアルバイトを頑張つて欲しいとのことだった。

「記念のエプロンだからといって、使わずに保管しておくような真似はしないで欲しい。ボロボロになるまで使つて欲しい。使われてこそエプロンなのだから」

とのことだった。そして、エプロンをくれたということが、結婚OKの証だった。

私は今も、妻のお父さんがくれたエプロンをして毎日働いてる。

エプロンをする職業に就いて本当に良かつたと思つてゐる。エプロンが私と彼女の家族との絆を作り上げたのだ。エプロンをしていなかつたら、妻と家庭を持つていなかつたかもしれないのだ。

お父さんと約束した通り、あのエプロンはボロボロになるまで使うつもりである。エプロンは我が家の制服なのだ――。